

芭蕉俳諧の限界

松 尾 靖 秋

芭蕉の俳諧が彼の古典的教養を基盤としてその上に成立するのであり、ことに初期から中期へかけての俳諧が、古典の知的遊戲から、その換骨奪胎への展開を示すものであるといふことは、芭蕉の俳諧を語る者の常識としてこれまで認められてきてゐるところである。わたくしはなにもそれに對してここで駁論を試みるつもりはないし、わたくし自身もそれを認めることにいささかも躊躇するものではないが、ただ、芭蕉のこのやうな古典追求の精神に對して、 \wedge 彼はこのやうな手段方法によつて古典を追求したといふ、既存の事實としてこれを論じ、また彼の古典追求の精神こそ彼の本來の精神であつて、あたかも生れながらにして古典遡奉者のごとく考へてその現象を追求し、たれもこれを疑ふ者がなかつた、といふのがこれまで行はれてきた芭蕉論のあり方であつて、何故に彼がそのやうな態度をとらざるを得なかつたかといふこと、つまり彼の古典追求の必然性といふやうな問題についてはあまり論じられてこなかつたやうである。そこでわたくしは、上述のやうなこれまでの考へ方とは對蹠的な考究方法によつて、芭蕉の俳諧における古典導入の態度について、つまりわたくしの論

法に従ふならば、彼の俳諧の限界性、といふやうな問題について實證的に考へようとするのがこの論の主旨をなすところである。

論述の便宜上、從來の說に對してやや重複の憾はあるけれどもまづ彼が古典をいかに取り入れたか、といふことについて概観した後半において、それがいかに彼にとつては必然の運命であつたかといふことに論及しようと思ふ。故にわたくしの本稿における要點はむしろ後半にあることを、あらかじめおことはりして置きたい。なほまた、彼のかうした古典攝取は、散文の上にももちろん現はれてはゐるけれども、一々例證する必要もないと考へられるので、ここではいちおう俳諧、なにかんづく發句についてのみこれを對象として眺めて行きたいと思ふ。

1

芭蕉の俳諧が貞門に發し談林を経て蕉風の確立に至つたといふことは、いまさらここに取り立てて述べるまでもないことのやうであるが、煩はしさをかへりみず、まづその跡をたどり、いかに彼の俳諧が晩年に至るまで貞門的な態度に支配されてゐたかを

考察する必要がある。

芭蕉の俳人としての出發は、明暦三年すなはち彼が十四歳のとき八戊と申の世の中よかれ酉の年といふ句をよんだといふ傳説的なことについては取り上げないとしても、寛文二年十九歳のころ伊賀上野城代藤室新七郎良精の臣となり、長子主計助良忠號蟬吟に近侍したのを事實と認めるならば、良忠が和歌・俳諧を好み、季吟を師としてゐた關係上、芭蕉も少くともある程度季吟との交渉を持ち、俳諧の試み程度のことはなしてゐたであらうことが充分推察できる。尤も季吟との關係をさほど重視せず、寛文六年蟬吟歿後の數年間における、芭蕉の行動の不明時代の季吟との關係については、最近これを否定的に見る論者もある一例へば野村一三氏「芭蕉傳記の新研究」―が、わたくしはすべて肯定的態度の上に立つて論述を進めようとしてゐるのであつて、その理由は論述の間におのづから明らかになつて行くであらうが、芭蕉の俳諧における出發、ならびにその展開の原據としての季吟の存在を、わたくしは無視し得ないのである。

寛文七年彼が消息を斷つたとされる年は、季吟にとつては湖春編「續山之井」の刊行された意義ある年であつた。同書卷末に記すところの八作者九百六十七人、國數四十八ヶ國、句數五千三十五句の文字を見るならば、貞門の俳風が當時いかに全國的に盛行を極めてゐたかといふことを想像することができ。『俳諧渡率公』（延寶四・汲淺編）に記すところによれば、八貞徳は御傘をひろけてあめか下にたゞふ諸人をまねかる是にこそりて此道を分つ人々の誹書みち／＼たりとあることからしても、その間の

消息が推察されるであらう。しかも季吟は、かうして打ち樹てられた貞徳の俳諧の世界をば、もつとも忠實に祖述するといふ態度に終始した人である。同書にとりあつかはれた俳書のうち、季吟の撰もしくは彼に關聯性のあるものをとりあげてみて、たとへば、「山之井」（正保五）「稻子集」（明暦二）「兩吟集」（萬治三）「新續犬筑波」（萬治三）「十會集」（寛文五）「哥仙誹諧摘」（寛文六）「赤紫」（寛文十一）「諸國獨吟集」（寛文十一）「花千句」（延寶三）等があり、その他にも、「歌仙發句」「師走月夜」「廿會集」「續通珠」「三物記」等があげられてゐるが、またそれ以外にも、俳書としては「いなご集」「増山之井」「季吟誹諧集」「室咲百韻」「誹諧埋木」「歌仙發句」「御傘大全」「百番誹諧發句合」「六百番誹諧發句合」等が存在することは、人の知るところであらう。註釋學者としてはもとよりのこと、俳諧の上では萬治・寛文を中心とする時代が、彼にとつてもつとも華やかな時代であつたやうである。延寶四年の「續通珠」にまで芭蕉の句が入集してゐることからしても、そのころ季吟と芭蕉との關係がかなり密接なものであつたことが想像されるし、芭蕉の行動不詳の時代の經緯をば充分に物語るものとすべきであらう。すなはち、芭蕉はあきらかに、季吟の精神をみづから體得することによつて、彼の俳諧觀をば形成して行つたのであつた。

さてわたくしはここで、季吟の俳諧觀について述べて置く必要がある。

よろづの道修行にいたるといふ事なれど、俳諧はわきて、造次にも思ひ、頓沛にもいひ出すはあるべからずと、ある人のたまひければ、せめてひと目にひとつ、だにつらねて、ひととせをもをくり侍らば、もしくはかたばかりも思ひうることなどかなからんとおもひ給へたれど、もとより物しらねばいひつゞけん詞のたねもなく、何を何とすべきよるべもなし。まづさるあらまし斗に、四の時にしかはりゆく空の詠め、木くきの色に見ゆるさま、をのづからうつり来る今のころばせをも、筆のついでにしるしとどめて、のちの題目にし、次に此ころ世にきこゆる集、をよび、花さきの翁、一蘗子、二家の句帳の中より、其のりとしてあらまほしき句牒をかきぬき、みづからの手本とせり。あへてうとき主人のためにするにはあらずあなかしこ。

(傍點筆者)

やや長文であるが、ここに引用した一文は季吟撰「山之井」(正保四刊・壺慶安元再刊)多部末尾に加へられた季吟の筆になるものである。いふまでもなく、俳諧修業の日常における態度について説いたものであつて、その主張の要點は、人物を知るゝといふこと、とその上に先人、なかんづく、花さきの翁、以下の人々の句作に學べといふことである。花さきの翁とは、もちろん貞徳のことであつてみれば、貞徳の俳風に對して季吟が全面的に肯定の態度をとつてゐたことは言及するまでもない。貞門における古典尊重の態度、すなはち古典的知識の要求は、俳諧にバイエティを附與するための要請ではあつたが、宗鑑・守武等によつてうち立てられた新しい文藝としての俳諧に對して、その形式上の固定化と

一應の權威を保持させるための試みであつたにちがひない。そのためには季吟はまことに恵まれた才能の人であつたといふほかはないが、季吟でなくとも、當時の貞門の諸俳人が、その古典的知識を動員するために、古典、なかんづく中世の古典に對して、これを究明することにかに興味を持つてゐたかといふことは、季吟時代の貞門の諸俳人によつてなされた多くの古典註釋事業に徴しても明らかである。古典に對する啓蒙の業は、近世初期の啓蒙思潮につながる時代の要求であつたかもしれないが、貞門の俳人たちが、その俳諧をば完成へとみちびくための不可欠のものでもあつた。季吟の場合についてみても、季吟は十九歳にして貞徳の門に入り、「山之井」の成立したのは二十三歳のときのこととて、既に俳人としての名聲の高かつたことが推察されることからしても、彼の本來の面目が註釋の業にあつたといふやうな後世の見解は、ここに改める必要があるのではあるまいか。

承應二年五月すなはち貞徳の歿年、彼の三十歳のとき、自序自跋をもつ大和物語抄六卷を公刊してのち、彼は註釋家としての多くの業績を遺したわけであり、註釋家としての名聲もここから生じたわけではあるが、その發足の動機には上述のごとき俳人としての意識のあつたことを推察することも難くはない。ややわづらはしいことであるが、季吟ならびに二三貞門俳人の古典註釋について考察しなければならぬ。

季吟の書には前記「大和物語抄」のほか、「湖月抄」六十卷、「春曙抄」十二卷、「徒然草文段抄」八卷、「八代集抄」百八卷、「萬葉拾穗抄」三十卷等のあることは從來知られてゐるところであるが

その他にも「群書一覽」(享保二刊)によれば、「訂正源氏物語抄」一冊、「伊勢物語拾遺抄」二巻のあつたことが知られるし、また同じく貞徳の學統をうけついで俳人加藤盤齋には、「枕草子抄」十五巻、「伊勢物語抄」六巻、「新古今増抄」二十巻、「徒然草抄」十二巻、「方丈記抄」一巻等從來知られたもののほか、同じく「群書一覽」によれば「伊勢物語初冠」五巻のあつたことが見られる。また貞徳門野々口立圃には、「十帖源氏」十巻、「おさな源氏」があることは周知のところであり、また繪をよくした彼に「源氏繪抄」三巻のあつたことも前掲書によつて知られる。その他松江重頼の「毛吹草」についてみても、それがいかに古典的知識によつて充たされてゐるものであるかといふことが知られ、いづれも貞門諸俳人の古典重視の態度をば露呈するものにほかならないのである。

3

貞門の徒におけるこのやうな古典尊重の態度はそのままに芭蕉によつてうけつがれた。すなはち芭蕉がその當初において季吟との聯關を持つたといふことが、彼の場合第一に宿命的な意味をもつのであつて、彼の將來への指向性がすでにここで決定せられたといふこと、すなはちその限界性の一端がここにも存するであらうといふことができる。

卑俗趣味に没し去つた宗鑑の態度から脱出するために、貞徳はこれまでの中世歌學によつて培はれた教養を驅使し、それによつて傳統文藝の保有する品位をば俳諧の上に定着せしめようとした

のであるが、「俳諧御傘」(慶安四刊)はその目的のためにつくりあげられたものにほかならなかつた。しかし貞徳にはじまる貞門の徒のこのやうな態度は、俳諧の上に古典を援用しようとするものであり、あるひは古典をばしひて俳諧化しようとするための素材的な意義を持つものであつて、それはいまだ未成熟な稚拙にして陳腐なものですらあつた。しかも「御傘」を最初とする貞門におけるもろもろの作法書が、かへつて俳諧の發展性を阻害し、遂にはその桎梏の内に窒息せしめられねばならなかつたといふ運命を孕むものであつたことは、皮肉といはざるを得ないであらう。しかも、貞門において頻りに主張せられた俳言の使用が、實は徹底したものではなくて、むしろ連歌の傳統に還元するといふやうな、矛盾した現象を招くに至つたのであつた。貞徳は「御傘」の序において、

抑はじめは俳諧と連歌のわいだめなし。其の中よりやさしき詞のみをつゞけて連歌といひ俗言を嫌はず作する句を俳諧といふなり。

といひ、季吟は「増山之井」(寛文三刊)において、貞徳の言を引用して、

俳諧すなはち百韻ながら俳言にて賦する連歌なれば云々。

と言つて、貞徳の説くところを祖述してはゐるけれども、「俳諧埋木」(延寶元刊)においては、

俳諧の字はわざことゝよむなり。これによりて皆人偏に戲言と思へり。かならずしもしからざるあり。

といつてゐるのを見れば、季吟の考へるところも、すでにやや連

歌の道に遡行し、上述のごとく確固たるものでなかつたことが知られるのである。畢竟するに、たとへば季吟の句、

年の内に踏みこむ春の日脚かな

が例の古今集八年の内に春は來にけりVのモデュレイトであり、
へ來にけりVがへ踏みこむVとされたところに、俳諧性のあるべき姿を彼は意識したのであつた。わたくしはここでしばらく、芭蕉の古典導入の態度について考察を進めようと思ふ。

4

芭蕉の句は管見によればおよそ千二百句と算せられるが、それらのうちでやや文藝性を認められてゐるもので、しかも從來、その發想の契機となつた出典について考察を進められてゐるものゝをこころみに若干取り上げてみるならば次のやうなものがある。

一、古今集に出典を擬せられてゐるもの。

袖の花や昔しのばん料理の間（嵯峨日記）

五月まつ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする

二、後撰集に出典を擬せられてゐるもの。

高水に里も旅寝や岩の上（芭蕉庵小文庫）

岩の上に旅寝をすればいと寒し苔の衣を我にかさん

三、新古今集に出典を擬せられてゐるもの。

秋風や藪もはたけも不破の關（野ざらし紀行）

人住まぬ不破の關屋の板びさし荒れにし後はただ秋の風

礎打ちて我に聞かせよ坊が妻（野ざらし紀行）

み吉野の山の秋風さよふけて古里寒く衣うつなり

田一枚植ゑて立去る柳かな（奥の細道）

道のべに清水流るる柳かげしほしとてこそ立ち止りつれ

四、山家集・同拾遺に出典を擬せられてゐるもの。

雲をりく人々を休むる月見哉（春の日）

け

何の木の花とも知らず匂ひかな（笈の小文）

何事のおはしますをばしらねどもかたじけなさのなみだ
こぼるる

五、千載集に出典を擬せられてゐるもの。

うかれける人や初瀬の山櫻（續山之井）

うかりける人をはつせの山おろしはげしかれとは祈らぬ
ものを

すべてのものを掲出する必要もなく、またその煩に堪えないが手近かに求められる例句をあげても右のごとくであり、これらはいづれも先學によつて明らかにされた芭蕉齋案の態度を示すものであるが、和歌よりの齋案ばかりではなく、源氏・伊勢・謡曲等とはとよりのこと、竹齋物語や往來物の構想をかり、あるひはそこに發想のいとぐちを求めたもの、あるひはまた、莊子、杜甫、杜牧その他の作品が非常に多くとりいれられてゐることは、これも從來説かれてゐるところである。なかんづく彼はその表現の態度においても、たとへばへ石山の石より白しVのごとく、漢詩的な表現をしはしば用ひてゐることが知られるのであつて、そのやうな換骨奪胎の態度ないしは表現手法には、まことに凡ならざるも

のがあるといへよう。

從來その翻案について論及されてゐる句数はまことに多いが、さうしたもののほかに、たとへば、

佗てすめ月佗齋が奈良茶歌（武藏曲）

佗てをれ七重のひざを八重櫻（山の井）

の句を必然的に聯想させるものであるし、また、

馬ほくく我を繪に見る夏野哉（泊船集）は

同じく季吟の、

一僕とほくくありく花見かな

なる句との聯關性が考へられるといふやうに、今少しその考察を詳密に行ふならば、現在知られてゐるものの上に、さらにかなり多くの同種のを加へることが出来るのではあるまいかと考へられ、それらの全句數に對する比率もかなり高いものとなるのではないか、といふことが推察されるのであるが、さうしたことはわれわれをして、芭蕉の俳諧があくまでも俳諧であつたといふ、その限界性をば意識せしめるものとなるであらう。

從來、芭蕉があまりにも俳聖視されてきたことに對して、（なほかゝる教祖視された芭蕉の姿を物語るものとして、岐阜縣において新しく發見された芭蕉の塑像に關し、本誌復刊第一輯に「芭蕉塑像一基―新資料紹介―」なる題名のもとに言及して置いた。）ここに認識を更める必要があるのではあるまいかといふことを痛感するのである。わたくしはここで「奥の細道」出發の際の「行く春や」の句を想起せずには居られない。この句に對しては、その解釋上これまでも種々問題が提起されてはゐるが、要するにこ

れが杜甫春望の詩「感レ時花濺涙、恨レ別鳥驚」心Vをふまへての作であり、しかも別離の切實なる悲しみの心中を詠出したものであらうといふことは、現在何人によつても認められてゐるやうである。しかしわたくしは、いかに當時における長途の旅とはいへ行程の到る處に訪ねるべき門弟を豫期せられる旅に出發するにあつて、彼がいかにどの別離の切實感を體驗したであらうかをやや疑ふものである。すなはちそれは、俳諧がしばしば挨拶としての儀禮上の言葉として用ひられ、なかんづく連句形式においては、それがいちじろしく社交性を帯びたものであつたといふことを、われわれは知つてゐるからであり、それからしてもわたくしは、上述のごとくこれを門弟へのはなむけの言葉と見たのである。そのやうな意義を發見できるものはこれ一句ばかりではない。尾張で門人杜國に逢ひ別れる際の吟として、

白髯栗に羽もぐ蝶の形見かな

との句があるが、これに對しても從來は、別離に堪へ得ないあまりに羽をもぎとつて形見に遺して行くといふ解釋が行はれ、切々の情を訴へたものとされ、いちじろしく感傷性を附與されて名吟のほまれ高いものであるけれども、これに對してすらわたくしは叙上の意味においてやはり疑をさしはさまざるを得ないのである。

大阪園女亭に招請された際の句、

白菊の目に立てて見る塵もなし

に至つては、その場に臨んでこのやうに述べざるを得なかつたであらう彼の立場に思ひ及ぶならば、あきらかに挨拶の句として受取るよりほかに途はないであらう。ただその表現の巧みさと、芭

蕉ほどの藝道精進の極においてのみかかる句作を可能としたであらうといふ、彼の力量に對しては、われわれはやはり敬服せざるを得ないであらう。わたくしとしても、芭蕉の藝術性に對しては毫もこれを否定するものではない。あまりにも教祖的な存在としてのみ眺め、絶對的な價值としてその藝術を認識しようとしたこれまでの芭蕉觀に對して反省を求め、眞にあるべき姿において彼を見直さんがための發言であることをここに一言して置く。

5

これまで考察してきたやうに、わたくしは、芭蕉の俳諧に對して晩年における深化はもちろん考へられるとしても、(なほ、晩年の輕みについては、俳句研究昭二五・四月號に試論をして置いた。)あくまでもそのいはゆる俳諧性を認めようとするものである。

ここでまた貞徳の態度について言及しなければならないが、貞徳の句、

行きつくす江南の春の光かな

が、杜甫の「行盡江南數十程」の續案であり、

花よりもだんごやありて歸る雁

が、古今集の「春かすみたつを見すてて行くかりは花なき里にすみやならへる」のそれであるといふことからしても、やや極論ではあるが、芭蕉の態度には生涯拂拭することのできなかつたものがこれであり、その態度にはいささかも相違が認められないものがあるであらう。このやうな態度は——それは近世の俳諧全般を通じての傾向ではあるが——また、實感を基盤としてその上に築かれ

た象徴性によつて形態づけられてゐる近代の俳句との根本的な相違であるといふことができる。

彼はしかし、このやうな限界性の中にあつて、その深化の度を増大して行つたのであつた。彼はひとたびは談林の俳風の中に身をひそめたといはれてゐるが、ただそれは、一時期を翻して彼の表現の中に見られる格調の亂れといふ現象においてのみ理解できるのであつて、たびたび觸れたやうに、彼にはたうてい内容的にまで談林的なものとはなり切ることができなかつたのである。それは彼にとつて單に一時的な試みであつたとわたくしは解釋せざるを得ない。それはまた芭蕉の宿命でもあつたがまた彼の體質的なものでもあつた。すなはちそれは、彼のはぐくみ育てられた環境につながる問題でもあつたといへよう。彼の武士的な、あるひは一面貴族的な精神が、たうてい談林的な卑俗さとは相容れなかつたのであつて、芭蕉が「宗因なくんば我々が俳諧今以て貞徳の誕をねぶるべし。宗因は此道の中興開山なり」と洩らしたといふ「去來抄」の言葉に對してすらも再考する必要があるのではあるまいか、といふことがわたくしの到達した一つの疑問である。

從來この言葉に對してはもちろん貞徳に對する否定的な言葉として解釋せられてきたのであつたが、わたくしはこれを貞徳に對する肯定の上に立つてのもの、とまではいへなくとも、別の見解を持ちたいのである。すなはち、宗因を稱揚するかのごとく考へられるこの言葉は、おそらくは單に俳諧における形式上の問題に言及したものであるといふこと、畢竟するにそれは、貞門的な式目による束縛に對する反撥の遂行と、それよりする内心の歡ひ、

彼のさうした心理的な動きが、彼をしてこのやうな言葉を吐かせたのではあるまいか、といふことが現在わたくしの想到してゐる解釋である。そしてそれとともに想起されるのは、これもしばしば引用されるところの西鶴に對する評言、

世上のはいかいの文章を見るに、或は漢文を假名に和らげ、或は和歌の文章に漢字を入れ、詞あしく賤しく云なし、或は人情を云とても今日のさわがしきくまぐまを探りともめ、西鶴が淺ましく下れる姿あり。我徒の文章はたしかに作意をたてて、文字はたとひ漢字をかるとも、なだらかに云つゞけ、事は鄙語の上に及とも、懷しく云とるべし。(去來抄)

といふ言葉であるが、これについてみても、それは單に個人西鶴に對した言葉であるといふよりも、談林的なるものへの反逆を意味するものであり、ことに末尾の「事は鄙語の上に及とも、懷しく云とるべし」といふ言葉が、貞門への復讐をば決意した芭蕉の心中を示すものにはかならないことが知られるであらう。そしてまた、[△]西鶴が淺ましく云々[△]の言葉は、俳諧に桎梏して散文の世界に足を踏み入れた一人間を通して、そこに談林俳諧の末路をば發見し、それを嘲笑する彼の心中の卒直なる表明ではあるまいか。すなはち、談林の俳人としてはなばなく出發した西鶴が、談林俳諧をすてて浮世草子の世界にその表現上の解決を求めたといふ、俳諧の未成熟さに對する嘲笑ではあるまいか。更にまた、當時の浮世草子の世界は、芭蕉の精神にはたうてい妥協することのできないものであつたであらうし、當代の小説自體が被支配階級たる町人を對象とし、かれらの中に溶けこんでゐたものであつ

たといふことから考へても、「貝おほひ」に見られる「衆道」の世界にひとたびは沈潜した彼ではあつたとしても、さうしたものか完全に脱却し切つてゐる現在、芭蕉にとつては浮世草子そのものに對してすら、かなりの嫌惡の情を抱いてゐたであらうことが推察されるのである。そしてしかもこのやうな態度をとらざるを得なかつた彼の資質的なものに對しても、わたくしは彼の限界性を發見することができるのである。

ここでわたくしは、何故に芭蕉が中世の古典を求めなければならなかつたかといふことについて、さらに一考を進めて置きたい。

6

芭蕉が中世の古典を求めねばならなかつたといふこと、すなはちその必然性については、さきにも述べたやうに、彼が貞門の俳人として出發したことにいちおうの根據をわたくしは認め、さらに、彼の體質的・資質的なものに第二の解決を求めたわけであるが、ここでさらに一つの解決を求めようと思ふ。

芭蕉の作品を通じて見られる諸傾向についてはすでに述べたところであるが、その現象の特異性の一つとして、わたくしは芭蕉が萬葉集に對してどのやうな態度をとつたかを考察してみたい。

近世における萬葉の註釋ないし研究は、二條派の歌學の傳統をつづ幽齋の門に學んだ人々、なかんづく木下長嘯子あるひは貞徳によつてまづ手をそめられたことは、從來文學史に説かれてゐるところであるが、中でも貞徳は、その著「歌林樸樸」において記紀萬葉以下の難語の註釋に従ひ、さらに季吟は天和二年「拾穗抄」

に着手したことが知られてゐる。尤も季吟にとつては、八代集ないしは源氏物語、あるひは枕草子に對しての興味・關心の方が強かつたことが推察されるが、季吟が萬葉集の註釋に志したについては、貞徳の萬葉集註釋未完の業をさらに繼承して、これを完成したものであると傳へられてゐるし、それからしても、彼の興味の中心はやはり八代集あるひはその周邊にあつたといへるであらうが、年代的に考察しても、芭蕉は萬葉集に對する興味をば、おそらく季吟からは得ることは無かつたであらうと考へられる。しかし既に下河邊長流による萬葉註釋の事業も、萬治年間には「僻案集」「萬葉集名寄」が、寛文初年には「萬葉集管見」が成立してゐたし、その他にもかなり盛に行はれてゐたことが考へられ、それからしても、芭蕉の志向が萬葉にも存してゐたとすれば、當然彼によつて取り上げられるべき可能性を充分に見出すことができるのであるが、芭蕉の作品についてわれわれが通觀するとき、そこにはいはゆる萬葉集的なもの影がいかに渺いかを發見するであらう。それは何を意味するものであらうか。結論からいへばここにも芭蕉の俳諧があくまでも俳諧であつたといふこと、すなはちその俳諧性が萬葉的なものとたうてい相容れるものではなかつたといふこと、またそれが必要としなかつたといふこと、この二つにわたくしはその解決を見出すのである。

俳諧がそれ自體いちじるしく社交の具としての性格を附與せられたものであり、芭蕉は晩年に至るまでつひにさうした意味における俳諧性から脱出することが不可能であつたといふことは、すでに述べた通りであるが、素朴にして單純、技巧性の少い萬葉的

な性格が、俳諧の要求するところとはいちじるしく相連してゐたことを認めなければならない。すなはち、萬葉的なものは、俳諧への援用にはもはや價値のないものであることが、芭蕉によつて――さらに古く俳諧といふ新しいジャンルの成立のときにおいて――認められてゐたからにはかならないであらう。芭蕉の作品の大多數のものが、もしも從來説かれてゐるやうに、その場に應じた彼の心からの感動の所産であつたならば、和歌の詠出の方法と俳諧のそれとが根本的に性格を異にするものではあるとしても芭蕉によつてはなんらかの形において受容され消化さるべきではなかつたかといふことを考へねばならない。芭蕉の俳諧においては、もはや古今的なものすらも影をひそめようとしてゐるのであり、そこにはいちじるしく技巧化し、遊戯化した新古今、あるひはこれに前後する時代の諸作、すなはち本歌取など、和歌における遊戯的氣分の横溢した爛熟頽廢期のもろもろの作品が追求されたといふことは、上述の意味からしても當然とすべきことであつた。

わたくしはこれまでかなり饒舌を弄してきたやうだ。このあたりで行論を結ばねばならないが、最後に、芭蕉の漢文的知識の導入のうちにとくに莊子について論及して置かなければならない。

7

芭蕉の俳諧を考察して「莊子」からの譏案の非常に多いことは從來もしばしば説かれてゐるところである。すなはち、二三引例を試みるならば、

永苦く偃鼠が咽をうるほせり（盧栗）

は、莊子逍遙遊篇の、

鸛鷀巢_レ於_レ深林_二不_レ遇_二一_レ枝_一、偃鼠飲_レ河_{不_レ過_二滿腹_一}

をその出典として考へられてきたものであるが、管見によれば、これは例の司馬遷もその「獨樂園記」のなかにそのまま引用してゐる言葉であるし、當時にあつてはかなり人口に膾炙してゐた言葉のやうでもあり、 \wedge 永苦く \vee はまことに巧みなその俳諧化である。あるひはまた、

うぐひすを魂に眠るか嬌柳（武藏曲）

の句は、莊子が夢に蝶となつたといふ故事の俳諧化であることはいふまでもなく、芭蕉のこのやうな態度は、一面嚴正であり一面佻屈な漢文とのとりあはせによる可笑味をねらつたものであつてここにも陋固として抜くべからざる彼の俳諧性が存するわけであり、さらにまたわたくしは、ここにかの江戸時代小説の可笑味と直接につながる意味を発見するのであるが、これはまた江戸時代に生きるすべての人々の好笑的態度に聯關性を持つ問題でもあると考へられる。また、

五月雨に鸛の足みぢかくなれり（東日記）

の句は、同じく莊子駢拇篇における、

長者不_レ爲_レ有_レ餘、短者不_レ爲_レ不足、是故鸛雖_レ短續_レ之則憂、鸛雖_レ長斷_レ之則悲。

の援用であることは既に説かれてゐるところであるが、これがいはゆる莊子の寓言論であり、それがまた既に貞門の諸俳人の間にも考察された問題であることを知るならば、芭蕉の説くところがあつたといふ虚實の論にしても、一芭蕉の虚實觀については別に

詳論したい。一貞門俳論との聯關性を無視することはできないであらうし、いひかへればそれは、芭蕉がその俳論においても貞門を脱し去ることのできなかつたことを示すものであり、ここにもわれわれはその限界性を發見することができるのである。もちろん虚實・寓言といふ言葉は、後期讀本等においてもしばしば現れる言葉であつて、上たとへば「三七全傳南柯夢」一當時にあつても普遍性のある言葉であつたことが想像され、さうした方向からの觀察をも必要とするのであるが、西鶴の寓言觀についても、敘上の意味における考察を要することが知られるのである。

以上わたくしは、芭蕉と貞門俳諧との關係、なかんづく季吟を重視することによつて、そこに芭蕉俳諧の限界性を求めたのであつた。なほこの上に、芭蕉の俳論と貞門俳論との比較検討をすることによつて、一層兩者の緊密性が明らかにされるのではないかと考へられるが、もはや紙數にもその餘裕が無いので、今回の試論はこれにとどめようと思ふが、貞門に出發した芭蕉が貞門に復歸せざるを得なかつたといふ宿命的なものについては、およそ言を盡したであらうと思はれる。わたくしがここに芭蕉俳諧の限界性を追求した所以は、芭蕉をしてその教祖的存在から解放し、眞に近代的な犀利な眼による洞察と鋭敏な感覺による批判精神によつて、その價値の再發見、ないしは再認識をせんがための提唱であり、芭蕉に對して深い愛情を有するが故に、あへてこのやうな提言をしたのであるといふことを、ここに結語としておきたい。